



檸檬れもんの季節

新しい学習指導要領では、これまでの

「言語事項」がいわば発展的に解消され、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」になった。「と」という助詞はいわば万能接着剤の働きなので、まあ、一言で言えば、「伝統的な言語文化」が新たに項目として入ったという見方もできる。

この「伝統的な言語文化」ということで思い出すのが俳句の季語である。季節のイメージと結びついたおびただしい言葉たちはまさに日本語の宝だ。そこで、クイズを一つ。次の季語の季節はいつでしょう？

レモン・朝顔・七夕・お中元

実際、これらの季節は、私の語感で素朴に考えれば「夏」だ。酸っぱい「レモン」はまさに運動部の夏の練習のイメージ。「朝顔」の観察は小学生の夏休みの宿題。「七夕」のこより作りは七月の風物詩、「お中元セール」もまた夏のデパートの風物詩だ。

しかし、今のところ、これらはみな秋の季語（一部には見直そうとする動きもあるようだ）。ちなみに、手元の歳時記で確認すると、昼顔、夕顔は夏の季語だが、「朝顔」だけは違う。古くからの文学の伝統では「朝顔」は秋のイメージのようだ。例えば『万葉集』には、

秋の花尾おぼろ花葛つばな花瞿なごし麦あむぎの花女郎をんな花

また藤袴朝顔の花 卷第八（二五三八）
という憶良の歌がある。といっても、この「朝顔」は今の「朝顔」と違うようだ（桔梗のこととされる）。伝統のある言葉では、その語が何を指すのかも確認する必要がある。

さて、一部の季語の季節が少しわかりにくいことにははっきりした原因もある。前述の「七夕」「中元」などは、太陰暦から太陽暦への移行によって所属が変わっている。本来、秋のものだったのが、ずれて

いるのである。

また、私たちの現代生活が変化して、季語の所属がわかりにくくなったということもある。「レモン」などは輸入物も含めて年中売っている。世の中が便利になると同時に、季節を感じるよすがが次第に少なくなっているというのも事実だ。「にんじん」は冬、「にんにく」は春の季語だが、これらなどもはや季節感がない。

一部の季節がわかりにくいのは事実だ。しかし、だからといって季節感や季語が大切でないということにはならない。「旬」は、その季節を生きる喜びを感じさせてくれる。せっかく「季語」があるのだから、季節感の再認識は、いいことのはずだ。

ということで、秋の夜長の今夜、季語としての「檸檬」を味わいつつ、レモンティーなぞはいかがですか？ ちょっと飲みたいあなたにはレモンひとひらを浮かべた焼酎でも。（おっと、「焼酎」は夏の季語！）

